

〈研究ノート〉

中米のナウァ系言語特徴に関する一考察 — 17世紀ピピル語文書の分析を中心に —

敦 賀 公 子

要 旨

Entre las numerosas lenguas florecidas en Mesoamérica, las nahuas llegaron a constituirse en “lingua franca” tanto en la época prehispánica como en la colonial. Esto sasisfizo la necesidad de un lenguaje común que permitiera facilitar la comunicación en una sociedad multilingüística como ésta.

Después de la conquista, los españoles consideraban la lengua mexica o náhuatl, una variante nahua que se hablaba en el altiplano central de México donde establecieron su gobierno, como lengua estandar. Por esta razón, se escribieron varios libros de referencia lingüística como diccionarios y textos gramaticales de náhuatl. Mientras tanto, otras variantes de la periferia se consideraban como “mexicano corrupto”, tal como se menciona en algunas crónicas escritas en español.

El presente trabajo tiene como propósito mostrar una evidencia de la estructura lingüística de la lengua nahua-pipil, una variante nahua de la región periférica más sureña, a través de un documento escrito en Santa Ana, El Salvador, en el siglo XVII. Este artículo se trata principalmente de un análisis morfosintáctico de sustantivos y verbos, haciendo la comparación con el náhuatl colonial y también con el nahua-pipil moderno, ya que no existe ninguna referencia lingüística de esa región en aquel entonces.

Bajo el dominio español con fines políticos, económicos y religiosos, se registró una buena cantidad de documentos en lenguas nahuas. Indudablemente, la mayoría está en náhuatl. Pero en la periferia también se escribieron muchos en variantes regionales obedeciendo a necesidades de caracter local.

A partir de la segunda mitad del siglo XX se ha retomado la importancia de los estudios históricos, etnohistóricos, antropológicos y de más, utilizando los documentos escritos en lenguas nahuas. Para ello, era muy natural que tuvieran la prioridad los del náhuatl del altiplano central. A su vez, los estudios sobre las variantes de la periferia se encuentran en una etapa emergente.

La lengua nahua-pipil actualmente se cuenta entre las lenguas en peligro de extinción. Este trabajo lingüístico servirá no solamente para mostrar la estructura de la lengua sino también para traducir el texto y comprenderlo como una de las pocas historiografías que narra una escena de un momento dado de los últimos portadores de esta lengua.

キーワード：中米（Centroamérica）、植民地時代ナウァ系言語文書（documentos nahuas coloniales）、ピピル語（lengua nahua-pipil）、形態統語論的言語分析（análisis morfosintáctico）、周辺部の言語（lenguas de la periferia）

はじめに

ナウァ系言語は、メシーカ王国の領地拡大や人や物の移動によって、スペイン人が到着する以前から、多言語社会のメソアメリカで広くリンガ・フランカを形成する言語として機能していたと考えられている¹⁾。またスペインによる征服後は、ヌエバ・エスパーニャ副王領の中央政府が置かれていたメキシコ中央高原のメシーカやトラスカラなどの言語であるナウァトル語が数あるナウァ系言語の標準語として、植民地当局から認識されるようになった。

16世紀半ば以降、植民地統治やキリスト教布教の必要性から、先住民諸言語の辞書や文書書の編纂が始まった。ナウァ系言語の場合、当然ながらナウァトル語がその対象となった。スペイン語が加わった多言語社会のヌエバ・エスパーニャ副王領において、先スペイン期からのナウァ系言語のリンガ・フランカとしての機能は、統治者にとっては多様な被統治者との媒介言語として有効であった。特にナウァトル語はその標準語として、植民地時代の数百年間、統治者に最も近い位置でその役割を担うことになる。

一方、周辺部のナウァ系言語は、スペイン人の記録の中で、「なまったメシーカ語 (mexicano corrupto)」と記され、歴史の表舞台に登場することはほとんどなかった。だが、それらの諸言語も、植民地中央政府から遠く離れた地でローカルな役割を果たし、その土地のナウァ系言語で文書が作成されたことが近年の調査でわかってきた。

従来ナウァ系諸言語の文書の発掘や研究は、歴史的価値や植民地統治のための重要性が高いと判断されるメキシコ中央高原のナウァトル語で作成されたものが優先されてきた。一方、それ以外の地域は、先住民人口密度が希薄で、政治・経済的重要性も低かったため、作成された文書記録の数自体も格段に少なかった。しかも、先住民言語で作成された文書記録となると、きわめてローカルな事項に関するものと考えてよかった。

しかし近年、そのような周辺部のナウァ系言語で記された古文書が各地で発掘されている。それらは歴史を編む史料としては不十分でも、言語史料としての価値が認められ研究されるようになってきた。

本稿では、このような周辺部の最南端に位置するエルサルバドルで、17世紀にナウァ系言語の一つであるピピル語で記された文書を取り上げる。その解説を通して分析された植民地期ピピル語の言語学的特徴、特に名詞、動詞の形態・統語論的特徴の提示を試みる²⁾。

中米諸国では、政治・経済的事情から、古文書の発掘や整理・編纂が遅れているが、特に先住民言語で作成された文書は、現在までに発掘された点数自体非常に少ない。しかも、植民地時代から、権力に対する抵抗の絶えなかったマヤの人々と比べると、人口的に少数であったピピルの人々に関しては、政治的関心も低かったようである。従って、当時の辞書や文書などが編纂された形跡もほとんど見当たらない。しかし、ピピル語は、長く厳しい内戦時代を経た今でも、エルサルバドルでごくわずかの高齢の話者らによって受け継がれている。

本稿は、植民地時代中期の17世紀、メキシコ中央高原というナウァ語の中心地から、マヤ諸言語圏を間に挟み、遠く離れた中米の地で作成されたピピル語の文書を分析することで、彼らの言語の歴史の実像の一側面を提示しようとするものである。

I. ナウァ系言語文書解読の研究史概観

古文書の解読には、それとほぼ同じ時空間で作成された辞書や文法書などの言語学的参考文献が存在することが望ましい。ナウァトル語の場合、リング・フランカとしてのグローバルな機能が認められ、植民地期初期から辞書や文法書が編纂されていた。19世紀後半から、それらの文献を使って植民地時代のナウァ語文書の発掘と解読・刊行が始まり、多くの研究の蓄積がある（井上 2009）。しかし、政治的に劣位である言語の場合、文字記録が極めて少ないのが現実である。ピピル語に関しては、そのような言語学的参考文献がないので、古文書の解読には、ナウァトル語のそれらの文献と研究成果に多くを頼ることになる。

中米のナウァ系言語の研究は、19世紀末のオットー・ストールによるグアテマラ、バハ・ペラパス県サラマでの言語調査にはじまった。20世紀前半には、1924年発表のアラウスによるエルサルバドルのナウイサルコ、1935年発表のシュルツ・ヘナによる同国イサルコにおける調査研究が行われている³⁾。その後、キャンベルが1970年から1976年にエルサルバドルの約10か村で行った調査に基づき、1985年に発表した研究などが知られている。しかし、古典ピピル語の言語学的研究については、史料自体が未発掘である。現在まで発表されているものは、ディキンによる16世紀末にグアテマラの先住民からスペイン王宛の書簡集に関する研究しかない（敦賀 2007:78-84）。

II. ナウァ系言語の特徴とピピル語の位置づけ

ナウァ系言語は広義ではユト・アステカ語族に分類される言語で、最も顕著な特徴としては、高い膠着性を上げることができよう。例えば、名詞の場合、所有格、不特定目的格などの接頭辞が伴うと同時に、単数・複数及び尊敬・親愛、性質・状態・動態などを表す接尾辞が付加され、名詞句のような機能が一つの単語に備わっている。また、動詞についても、一つの単語が動詞句のような機能を有している。すなわち、動詞語根を中心に、動作主格、特定・不特定目的格、過去時制を表す接頭辞などが付加される。同時に、主格人称⁴⁾の単数・複数に対応した過去・現在・未来時制を表す接尾辞、あるいは使役、受身、動向などを表す接尾辞が付加されることがある。さらに、このような名詞と動詞を文の核として、冠詞、接続詞などに相当する不変化詞 (*partícula*) を用い、文意を豊かにすることができる。このような膠着語という特性により、ナウァ系言語は様々な単語を組み替えて造語する力に富んでいるのである。

ナウァ系言語の分布域は、かつてのメソアメリカ文明圏と重なる広大な地域である。メキシコのナウァ系言語の大まかな地域区分では、メキシコ中央部 (*centro*) とそれ以外の周辺部 (*periferia*) に区分される。先述の通りナウァ系言語の古典語については、周辺部の史料の発掘自体少なく、言語学的特徴に基づいた分類研究はまだ発表されていない。しかし、20世紀後半以降周辺部においても、現代語に関する調査・研究が徐々に行われるようになった。

1970年代には、メキシコ国立自治大学の言語学者ラストラ監修のもと、ドゥランゴ州からエルサルバドルに至る約100か村で、大掛かりな現代ナウァ系言語の調査が行われた。その調査に基づき、ラストラは次表のようなナウァ語の類型論的分類を提示している。そこでは、中米のナウァ系言語であるピピル語は、「東部周辺地域」の言語と同じグループに分類されている (Lastra

1986:189-190)。

しかし、この調査を通じて、各村の言語学的特徴が浮き彫りになったが、「その分類はますます難解となった」とラストラは述懐している。これは、スペイン語が政治的な公用語として浸透している現代では、ナウァ系言語のかつてのようなリンガ・フランカとしての機能は衰退し、限られた地域と人々間のローカルな役割を担うに留まっていることが原因の一つであろうと考えられる。

ラストラによるナウァ系言語分類 (Lastra 1986:189-190)

西部周辺地域	西部海岸地方, メキシコ州西部, ドウランゴ州, ナヤリ州
東部周辺地域	プエブラ州山岳部, テワンテベック地峡地帯, 中米ピピル語
ワステカ地域	ベラクルス州北部, プエブラ州北部, サンルイスポトシ州, イダルゴ州北東部
メキシコ中央部	メキシコ市周辺, プエブラ州, トラスカラ州, ゲレロ州

一方、ナウァ語の祖語 (proto-nahua) からの変遷を比較方言学的に研究してきたディキンは、ナウァ語が祖語から西部ナウァ語と東部ナウァ語に大きく分岐して発達したとしている。中米のピピル語に関しては、ゲレロ州中部、プエブラ州山岳部、テワンテベック地帯部と同じ東部ナウァ語に分類している (Dakin y Lutz 1996:175)。

ベラクルス州南部のナウァ系言語が話されるパハパン村で言語調査したメキシコ国立人類学歴史学研究所のデ・レオンは、中米のピピル語が同村の言語に最も近いと述べている (De León 1976:41-47)。

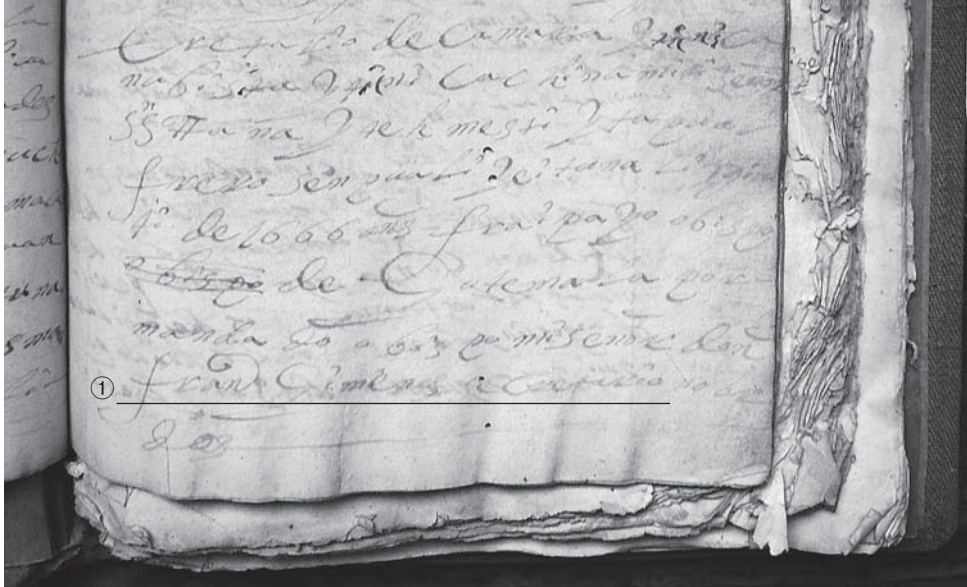
III. 17世紀ピピル語の言語学的特徴

1. 『リベラ訓令』とその書記

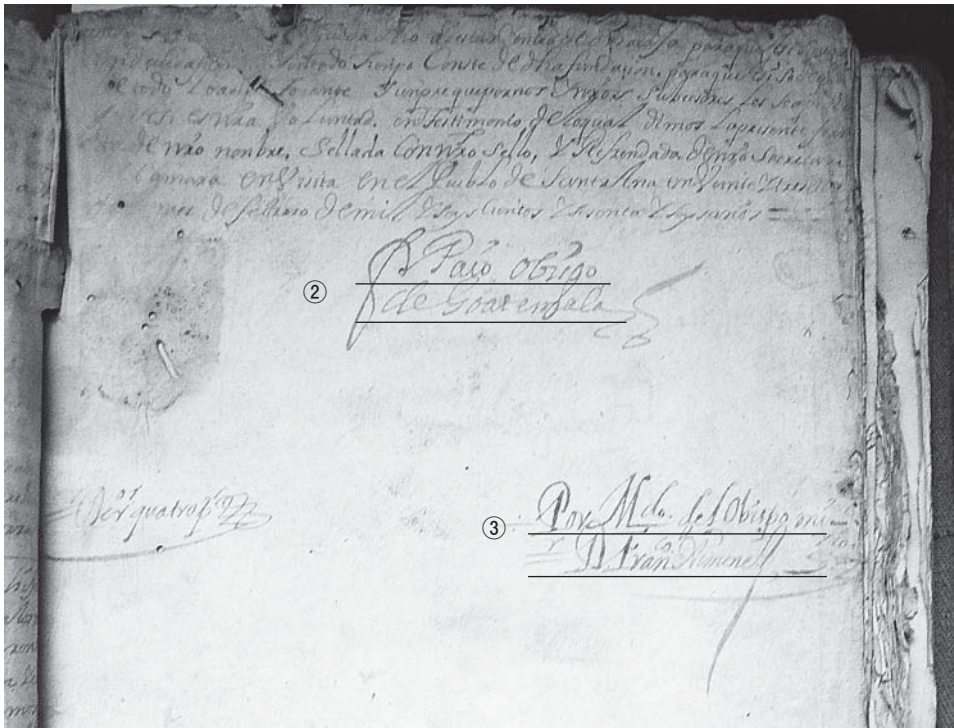
本稿で分析する17世紀のピピル語文書は、1666年にエルサルバドルで記された『リベラ訓令』である。この文書は、エルサルバドル第二の都市サンタ・アナ市のカテドラル所蔵『サンタ・ベラクルスのコフラディア記録』 (*Libro de la Cofradía de la Santa Veracruz*, Archivo de la Catedral de Santa Ana, El Salvador) の中に収められている⁵⁾。『リベラ訓令』におけるピピル語の言語学的特徴について説明する前に、同訓令を書いた書記について若干の考察を行いたい。

17世紀に入ると、グアテマラでは司教区本部の管理が届かない地方の先住民共同体において、コフラディアの数が増加していった。その結果、コフラディアの管理・運営を通じて不当に蓄財を増やす聖職者らの取締りが問題となっていたようである (敦賀 2009:28-29)。本訓令は、そのような状況下で、グアテマラ司教区のバヨ・デ・リベラ司教⁶⁾の命で、サンタ・アナのサンタ・ベラクルスのコフラディアに言い渡された訓令だと考えられる。

18世紀初頭の『教会巡察記録』には、このコフラディアの成員はピピル語を使用する先住民であったと記されている (Ruz 2002 II:331-332)。そのため、現地先住民社会への植民地統治とキリスト教の浸透を伺わせるスペイン語からの借用語の混入が認められる以外は、本訓令はピピル語で記されている (敦賀 2009:42-44)。文末には1666年2月23日の日付が付され、当時のグアテマラ司教区のリベラ司教の命によって、彼の秘書フランシスコ・ヒメネスが書いたものであることが記されている (写真参照)。



『リベラ訓令』最終頁 (Libro de Cofradía de la Santa Veracruz, folio 54r.) (筆者撮影)
① “Francisco Gimenes, Secretario” (「フランシスコ・ヒメネス、秘書」) と記されている。



リベラ司教とヒメネス秘書の署名 (Libro de Cofradía de la Santa Veracruz, folio 4r.) (筆者撮影)
② “Fray Paio, Obispo de Guatemala” (「パヨ師、グアテマラ司教」) リベラ司教署名
③ “Por el Mando del Obispo, Don Francisco Ximenez” (「司教の命により、ドン・フランシスコ・ヒメネス」) と記されている。

なお『サンタ・ベラクルスのコフラディア記録』には、『リベラ訓令』と同じ日付で、文末にリベラ司教とヒメネス秘書の署名（写真参照）が記された同コフラディア設立許可のスペイン語の文書も収められている。同文書は、コフラディアの管理・運営規則の概要について言及しているが、本訓令の原文かどうかは現時点では不明である⁷⁾。

ここで問題なのは、そのヒメネス秘書の署名は先に述べた『リベラ訓令』の文末にある署名とはまったく異なることである（写真参照）。では、この『リベラ訓令』を実際に書いた書記は誰なのだろうか。この文書以外にも、1660年の文書⁸⁾からも、リベラ司教の秘書として、上述の1666年のスペイン語文書の文末のヒメネスの署名と同じものが見つかっている。そのことから、ヒメネスが同司教の秘書として文書の作成を担当していたことは確かだと考えられる。しかし、それらのヒメネス秘書の署名と『リベラ訓令』の文末署名はまったく異なることから、ヒメネス秘書は同訓令を作成した書記ではないと思われる。サンタ・ベラクルスのコフラディアの成員であったピピル先住民らに対して、誰かスペイン語とピピル語に通じていた人物が、リベラ司教がスペイン語で作成もしくは口述した原案をピピル語に訳したのではないかと推測される⁹⁾。

2. 『リベラ訓令』のピピル語の分析の方法と問題点

『リベラ訓令』は訓令（ordenanza）という法的性格から、使われている語彙や構文に偏りがあることは明らかではあるが、本稿では中米におけるナウア系言語の貴重な歴史的言語資料として同訓令を取り上げる。名詞、動詞を中心に、形態・統語論的（morfosintáctico）特徴を分析することで、当時の文法の一側面の解明を試みたい。

実際の解説・分析に当たっては、先述のとおり中米で編纂された古典ピピル語解説に役立つ辞書や文法書がないため、メキシコの古典ナウアトル語解説に使用される言語学的参考文献を手がかりとした¹⁰⁾。また、古典語とはいえ、言語学的特徴は現代語と通じている部分もあるため、シュルツ・ヘナやキャンベルなどの現代ピピル語の研究成果、ならびに1998年から3年間、筆者がエルサルバドルで実施した調査で収集したデータも参考にした（敦賀2000）。

形態・統語論的特徴を解明するに当たって、比較のために引用するメキシコ中央高原のナウアトル語の表記は、16、17世紀のモリーナやカロチの辞書や文法書に基づいた標準的なナウアトル語に従うものとする。また、現代ピピル語の表記は、キャンベルの研究と筆者の現地調査の資料に基づいている。

この他、用例分析のためには、なるべく近い時代の類似の主旨で書かれた文書と比較することが望ましいが、17世紀後半のナウア系言語文書の研究は未だ数少なく、その上先述の通り周辺部のローカルな事項に関する文書の研究は近年始まったばかりである。そのため、本稿では既存の限られた研究から、法的性格に近い文書として、レジェス・ガルシアが解説した1559年にプエブラ州クアウティンチャン所蔵のスペイン王の命によって書かれた同村先住民への納税や労役などに関する訓令¹¹⁾、エレラ他が分析した1562年にトラスカラで書かれた裁判記録¹²⁾、そして先述のディキンが分析を行った16世紀末グアテマラの先住民がスペイン王へあてた書簡集から用例を適宜取り上げることにしたい。

中米の古典ナウア語の資料や研究蓄積は未だ少なく、今回の分析結果には不明瞭な点が少なからず残っている。また、本訓令は、スペイン語の原文、あるいは原案を現地で先住民向けにピピル語に訳したためか、スペイン語からピピル語には訳しきれない箇所もあるように思われ

る¹³⁾。こうした問題点の解明は今後の検討課題とし、本稿では、現段階までの解読・分析の結果、明確にわかったものだけを抜き出しまとめることとする。

3. 『リベラ訓令』の形態・統語論的特徴

次に形態・統語論的特徴の分析を述べるが、各用例をまとめた表には解読の便宜上筆者が付した『リベラ訓令』の文章番号を記した(敦賀 2009:34-41)。

1) 『リベラ訓令』の音素の特徴

形態・統語論的分析の説明に入る前に、『リベラ訓令』のピピル語表記に現れる主な音素の特徴について述べることにしたい。

『リベラ訓令』の古典語並びに現代語とも、ナウアトル語の /w/ や /u/ 音が、擦音化し、/g/ 音に変化している。また、ナウアトル語の単数名詞の接尾辞や不特定目的格などに特徴的な二重子音の [tl] は、[t] になる特徴がある。この特徴が明らかな主な名詞、動詞を下記の表にまとめる。

① /g/ (pipil) → /u/, /w/ (náhuatl)

PIPIL	文章番号	NAHUATL	日本語訳
neguat	1	nehuatl	私
yeguantin	3, 5, 8, 9, etc.	yehuantin	彼ら, 彼女ら
xiguit	5, 7, 8, 9, 16	xihuitl	年

② /t/ (pipil) → /tl/ (náhuatl)

PIPIL	文章番号	NAHUATL	日本語訳
neguat	1	nehuatl	私
xiguit	5, 7, 8, 9, 16	xihuitl	年
chinamit	1, 11, 16, 18, 19	chinamitl	町, 村, 地区
tatacatsin	1	tlatlacatzin	人(尊敬形)
(qui) tatani (squte)	3	tlatlania	問う, 罪を問う
tamanti	10, 13, 14, 16	tlamanti	数える

この2つの音素の特徴は、植民地時代の記録に「なまったメシーカ語(ナウアトル語)」と記された要因とされているものと同じである。これらの音素特徴は、昔も今もメキシコ中央高原以外では、さほど珍しくない現象である¹⁴⁾。また、アルファベットという限られた文字を使つての表記であるため、実際の全音素を正確に表記するには限界があることは否めない。

2) 『リベラ訓令』における名詞の特徴

①単数・複数の普通名詞

前述したように、ナウアトル語では単数普通名詞の接尾辞は、-tl や -tli が典型的である。しかし、次の事例に示した neguat (私), chinamit (町, 村, 地区など), xiguit (年) などのように、『リベラ訓令』では、単数の普通名詞の接尾辞は、-t となる。

文章 No.1: *Neguat maestro Don frai Payo de Rivera orden ypal San Agustin ycaque titilis tatta Dios yguan santa sede apostólica obispo ypal Guatemala yguan Berapas ypal consejo tuguei tatacatzin Rey...*

私、聖アグスティン会師であるパヨ・デ・リベラは、主イエス・キリストならびに我々の偉大なる王の命によるインディアス諮問会議のグアテマラ・ベラパス県の聖なる司教区の司教であります…

文章 No.2: Yguan quituatta ycyeyeman tunali quipiata nican *devosion* yca *ermandad* ypal guelis ytic nican chinamit yguan ypal guelis muscallis yguan mutequutilis tuteucuyo *dios*.

それは、その日この町の信徒団からここに献身があったと報告され、そしてそれによって（コフラディアの）家が設立されるということですが、我々の主のための奉仕労働として行われるとのことである。

文章 No.5: yguan yeguantin *mayordomos* yeguantin axcan nemis yguan ocsequantin gual calaquisquet maquil quiquextisquet ylguitzin ypan ytunali ic[sic] xiguit…

そして、彼らマヨルドモ（コフラディアの財産管理員）らが、今ここに参上し、彼らと今後就任する他の5名が毎年恒例の祭りをを行う…

単数名詞接尾辞 -t

PIPIL	文章番号	日本語訳
neguat	1	私
chinamit	1, 2, 11, 16, 18, 19	町, 村, 地区
xiguit	5, 7, 8, 9, 16	年

この他、ナワートル語と同様に、tunali（日）、mili（農地、トウモロコシ畑）など、接尾辞 -li も散見する。しかし、本訓令の主旨がスペイン統治者から先住民コフラディアに対して管理・運営についての規則を言い渡した訓令という主旨のためか、あるいは作成年代が17世紀後半のためかは断定できないが、名詞についてはピピル語よりもスペイン語からの借用語の方が多用されている（敦賀 2009:42-44）。

また、複数名詞の接尾辞は、ナワートル語では古典語や現代語においても一般的に -tin もしくは -me である。『リベラ訓令』では、下記の事例に示したように -tin の使用を確認することができた。

なお、ナワートル語でもしばしば用いられているが、現代ピピル語では、語頭部分の反復（reduplicación）によって複数を表すことが多い（Campbell 1985:51-53）。例えば兎（単数：tuchit）の複数形は、tuhtuchin、また鹿（単数：mazat）は mahmazat となる（敦賀 2000:319-320）。

また、現代ピピル語では、人に関する名詞には、-met がしばしば見られる。例えば人称代名詞1人称複数形は tahamet（私達）、3人称複数形は yehemet（彼ら）となる（Campbell 1985：51-53、敦賀 2000:324）。しかし、本訓令では、下記のように -tin が確認されたが -met の使用は見られなかった。

文章 No.3: ... ypal quimatisquet ten *gracia yndulugencias* quichiuasquete *ganar* yeguantin *cofrades*.

… コフラディアの団員である彼らが何らかの恩恵と免償にあずかることを知らせる。

文章No.5: yguan yeguantin *mayordomos* yeguantin axcan nemis yguan ocsequantin gual calaquisquet maquil quiquextisquet ylguitzin ypan ytunali ic[sic] xiguit yguan ocsequantin ylguitzin yguan *misa* ypal sese mesti ypal *cofrades* yolque yguan miquete yguan mumacas *ylimosna*.

そして、彼らマヨルドモ（コフラディアの財産管理員）らが、今ここに参上し、彼らと今後就任する他の5

名が毎年恒例の祭りを行うこと、さらに現在の団員、ならびに他界した団員たちのために、その他毎月祭りとミサを行うことが義務づけられることになり、そのために献金がされる。

文章 No.7: 2[1]. Achatupa nitenaguatia ynpan se[se] xiguiti muchiguas *ele[c]sión nepatalus alcaldes mayordomos yguan yu muchintin ofis[i]ales.*

まず、毎年、アルカルデ、マヨルドモ、そして役員全員の改選を行うことを命じる。

文章 No.8: yguan ma[sic] muytas *ycabildo yeuantin yeetin christianos* ypal quitequitisilis ...

そして、(それらの新任者は) 彼ら3名のキリスト教徒からなる市参事会によって承認されるものとし ...

複数名詞接尾辞 -tin

PIPIL	文章番号	日本語訳
yeguantin	3, 5, 8, 9, etc.	彼ら, 彼女ら
ocsequintin	5	その他
muchintin	7, 18, 21	全員
yeetin	8	3名

②尊敬を表す接尾辞 -tz (s) in

ナウァトル語文法で特徴的な *reverencial* や *honorífico* と呼ばれる尊敬や敬愛を込めた敬称や敬語に相当する接尾辞 -tz (s) in は、『リベラ訓令』の中でも用いられている。下記に示した事例にあるように、「スペイン国王」*tuguey tatacatsin Rey* (我らの偉大なる尊敬する主人, 王), 「神」*dios totatzin* (尊敬 / 敬愛する我らの主 / 神), や *dios tepitzin* (尊敬 / 敬愛する神の子) に認められる。

文章 No.1: *Neguat maestro Don frai Payo de Rivera orden ypal San Agustin ycaique titilis tatta Dios yguan santa sede apostólica obispo ypal Guatemala yguan Berapas ypal consejo tuguei tatacatzin Rey*

私、聖アグスティン会師であるパヨ・デ・リベラは、主イエス・キリストならびに我々の偉大なる王の命によるインディアス諮問会議のグアテマラ・ベラパス県の聖なる司教区の司教であります ...

文章 No.19: yguan nican tenaguatil nich[iua] *confirmara yca ordenansa y [sic] nican santa cofradía ycaymaqui[sic] dios ttotatzin yguan dios tepitzin yguan dios espiritu santo.*

そして、ここにこの訓令で、この聖コフラディアを我らが尊敬すべき父なる神と息子なる神と聖霊のもとに承認を行うことを命じる。

「司祭」は、次の事例のように *tata cura* と書かれている。この *tata* はナウァトル語では「父」を意味し、スペイン語の神父 (*padre*) を直訳したものと思われる¹⁵⁾。しかし、尊敬を表す接尾辞 -tzin は付加されていない¹⁶⁾。

文章 No.8: ...yeguan *tatu padre cura* yguan ypal nican *ele[c]sión mupias se libro canpa muycuiylus yguan canpa muyculosquette yeguantin ermanos calaquisquete ypan se xiguiti.*

...司祭の立会いのもと、ここで選挙が行われ、(その結果は) 台帳に記録され、その年新しく入った団員たち

の名が記される。

その他、アルカルデ (alcalde) やマヨルドモ (mayordomos) や役人 (oficiales), などの植民地行政役職などの用語はピピル語には訳されず、スペイン語からの借用語となっている。これら
の用語には、「司祭」と同じく敬称は付加されていない。

文章 No.7: Achatupa nitenaguatia ynpa se[se] xiguiti muchiguas *ele[c]sión nepatalus alcaldes mayordomos yguan yu muchintin ofis[i]ales.*

まず、毎年、アルカルデ、マヨルドモ、そして役員全員の改選を行うことを命じる。

他の名詞で尊敬の接尾辞 -tzin が付けられたものとしては、「祭り」がある。次のように ilguit に -tzin が付加され、ylguitzin となっている。

文章 No.5: yguan yeguantin *mayordomos* yeguantin axcan nemis yguan ocsequantin gual calaquisquet maquil quiquextisquet ylguitzin ypan ytunali ic[sic] xiguit yguan ocsequantin ylguitzin yguan *misa* ypal sese mestí ypal *cofrades* yolque yguan miquete yguan mumacas *ylimosna*.

そして、彼らマヨルドモ (コフラディアの財産管理員) らが、今ここに参上し、彼らと今後就任する 5 名が毎年その月に恒例の崇敬な祭りを行うこと、さらに現在の団員並びに他界した団員たちのために、毎月崇敬な祭りとミサを行うことが義務づけられることになり、そのために献金がされる。

ylgui-tzin (崇敬な祝祭) という表現には、現地の先住民にとって祭りが有していた重要性が解る。16 世紀末にグアテマラで記された書簡集には、uey iluitl という用語が使用されているが、これは、uey (古い、尊ぶべき) という形容詞で祭りの重要性を表したものである。ディキンは、キリスト教の教会組織や暦に関する用語は「祭り」以外はほとんどスペイン語からの借用語が導入されていることを指摘している。従って、この「祭り」を尊ぶことは先スペイン期からの伝統であろうと分析している (Dakin y Lutz 1996:160)。

なお ilguit には、「祭り」という意味以外に、「日」の意味もある。しかし、次の事例のように、単なる「日」の意味で用いられる場合には、尊敬の接尾辞は見られない。

文章 No.14: ...se ylguiti pia ypal quiquitasque muchi tata *cura* yguan *ofis[iales]* quiquitasque yca munacas yta qui *Santa [Co]fradía*.

ある日司祭とマヨルドモ全員の承認の上、... 聖コフラディアもそれを確認する。

尊敬を表す接尾辞 -tz (s) in

PIFIL	文章番号	日本語訳
(tuguey) tatacatsin (<i>Rey</i>)	1	(我らの偉大なる) 尊敬する主人 (スペイン王)
dios totatzin	19	我らの尊敬 / 敬愛する神
dios tepitzin	19	尊敬 / 敬愛する神の子
ylguitzin	5	崇敬な祝祭

これらの尊敬を表す接尾辞 *-tz (s) in* は、ナウァ系言語、特にナウァトル語の先スペイン期からの伝統と考えられている。この『リベラ訓令』が作成された状況や経緯は明らかではないが、この接尾辞の使用は、先住民側からスペイン王やキリスト教への敬意や親愛の表れと解釈することができるかもしれない¹⁷⁾。もうひとつの解釈としては、先にも述べたような地方のコフラディアの管理運営に携わる聖職者や行政官らの不当な蓄財を規制しようとするリベラ司教の政治的な意図が反映されたものとすることも可能であろう。

③所有を表す接頭辞

ナウァ系言語の人称は、西欧語と同じく、1人称・2人称・3人称の単数・複数に区別される。各人称に対応する所有接頭辞としては、*no-* (私の), *mo-* (あなたの), *i-* (彼 / 彼女の), *to-* (私達の), *amo-* (あなた方の), *im-* (彼ら / 彼女らの) という6種類がある。『リベラ訓令』では、*no (u)-* (私の), *to (u)-* (私達の), *i-* (その) の3種類の所有接頭辞が確認され、これはナウァ語の標準的な用法であると思われる。主な用例を次表にまとめる。

所有を表す接頭辞 *no (u) -* 私の, *to (u) -* 私達の, *i (y) -* 彼の, その, etc.

PIPIL	文章番号	日本語訳
<i>no-i (y) xpan</i>	1, 4	私の - 前で
<i>tu-guei</i>	1	我々の - 偉大な
<i>tu-tecuio dios</i>	2	我々の - 主, イエス・キリスト
<i>y (i-) tunali</i>	5	その - 日
<i>y-sobra</i>	9	その - 余剰金
<i>nu-tenaguatil</i>	13, 14, 16, 17	私の - 命令

メキシコ中央高原では、所有接頭辞の後に母音がかかる場合、しばしば後の母音が強調され、所有接頭辞の母音は消える傾向 (*proclítico*) がある。例えば、16世紀後半にトラスカラで記述された裁判文書には、*noixpan* (私の面前) は *nixpan* に、*toixpan* (我々の面前) は *tixpan* となっている (Herrera, Peralta, Von Mentz y Rockwell 2007:152-153)。しかし、『リベラ訓令』では所有接頭辞の母音は消えず、明確に発音されるようである。この特徴は現代ピピル語でも見られるものである (敦賀 200:318-319)。

文章 No.4: *yguan ypapa ya niquita muchi recaudos yguan quenta quixpantiquet noyxpan ypanpa axtaxcan nicchigua mandar mamuscalis nican santa cofradia.*

そして、私は私の前に提出されたすべての収支の明細を確認したので、本日ここに聖コフラディアの家を設立することを命じたものである。

3) 「リベラ訓令」の動詞の特徴

本節では、『リベラ訓令』のピピル語における動詞の時制の特徴について述べることにしたい。「訓令」という主旨のため、ほとんどが未来時制となっている。この他、現在完了と思われる時制と現在時制がいくつか認められるが、過去時制は一用例だけである。

なお、ナウァトル語には、他動詞の場合、目的格に相当する形態素が伴い、また動詞によっては、語尾に受身や要因・使役を表す形態素が伴う特徴がある。本訓令のピピル語のそれらの点につい

ては、今後の分析課題としたい。

動詞の形態・統語論的分析を行うにあたって各形態素の機能を指す略号は次のとおりである。

1 : 1 人称	O : 目的格	PRET : 過去時制
2 : 2 人称	PL: 複数	REFL : 再帰代名詞
3 : 3 人称	PERF: 完了	S : 主格
FUT : 未来時制	PRES: 現在時制	SG: 単数

①過去時制

過去時制は次の1箇所のみ認められた。

文章 No.1: ...ypanpa se *petision* mupuac nuyxpan ytte[c]hpa *cofrades Santa beracruz* yti[c] nican chinamit *señora Santa Ana*.

... ここサンタ・アナ市で私の面前において、この町のサンタ・ベラクルスのコフラディアの立会いをもって、ある懇願書が読み上げられた。

PIFIL	文章番号	NAHUATL	日本語訳 (西語訳)
φ -mu-pua-c 3S-REFL- 読む -PRET	1	mo-pua-c	読まれた (se leyó)

語尾の -c は、ナワトル語の完了過去形と同じ用法であると思われる。なお、ナワトル語の過去時制にしばしば見られる接頭辞 o- は、ここでは見られない。

②現在時制

現在時制であることがはっきり断定できるのは下記の2用例である。いずれもナワトル語と同じ使い方だと思われる。

文章 No.7: Achatupa nitenaguatia ynpan se[se] xiguiti muchiguas *ele*[c]sion nepatalus *alcaldes mayordomos* yguan yu muchintin *ofis[i]ales*.

まず、毎年、アルカルデ、マヨルドモ、そして全役員の改選を行うことを命じる。

文章 No.21: yguan u nichia *conseder* muchintin *cofrade* calaquisque maqui asican a[sic] *yndulgencias yperdon* utema muchintin *santo pontifese* yguan nusan nichiua *conseder* tent[sic] muyquilosquete yca *cofrades*[sic] qui asican unpuali tunali *yndulgencia*.

また、私は今全ての団員に聖なる教皇による免償と免罪がもたらされることを確認し (確認することを行う)、本日それらの団員に (...) 40 日の免償が記されることを確認する (確認することを行う)。

PIFIL	文章番号	NAHUATL	日本語訳 (西語訳)
ni-te-naguatia 1S-O- 命じる PRES	7, 10, 16, 18, 23	ni-te-naguatia	私は (彼らに) 命じる (yo les mando)
ni-chiua 1S- 行う PRES	4, 21	ni-chiua	私は行う / させる (yo hago)

③現在完了と思われる接尾辞 -ta

現在完了と思われる動詞は下記の3箇所に見られる。ディキン博士によると、これらの現在完了とみなされる動詞の接尾辞は、複数人称主語の現在形接尾辞 -t に、完了を意味する不変化詞 ya が付加されて、-ta となったと考えられるということであった。なお、現在形接尾辞 -t は、メキシコ中央高原では見られないが、プエブラ州やオアハカ州の現代ナウァ系言語でしばしば認められるとのことである¹⁸⁾。

しかし、表に示した ni-te-naguatia-ta は、主語が一人称単数であるにもかかわらず、同じ語尾 -ta が付加されている。なお、現代ピル語の場合、現在完了の語尾は、単数主語で -tuk、複数主語で -tiwit となる (Campbell 1985:67)。また、ナウァトル語では、それぞれ、-toc、-toqueh となるのが一般的である。いずれの場合も、現在完了と完了過去の違いは、それほど明白ではないようである。この接尾辞を現在完了であると断定するには、さらに用例を分析する必要がある、今後の課題としたい。

文章 No.2: Yguan quituatta ycayeman tunali quipiata nican *devosion* yca *ermandad* ypal guelis ytic nican chinamit yguan ypal guelis muscallis yguan mutequitis tutecuyo *dios*.

その日この町の信徒団からここに献身があったと報告され(言われた),そしてそれによって(コフラディアの)家が設立されるということですが、我々の主のための奉仕労働として行われるとのことである。

文章 No.6: ...nitnaguatiata yteh nu arca sel yguan maz niquixitis muchi nican tenaguatis yteh nican *ordenansas*.
すでに、私は命じた (...) すべてこの訓令の中に明記されることを確認する。

現在完了 (?) 接尾辞 -ta (単数? 複数? 主語)

PIFIL	文章番号	NAHUATL	日本語訳
φ -qu-itua-tta 3S-O- 言う -PRES.PERF	2	qu-itoa-toqueh	それが言われた (lo han dicho)
φ -qui-pia-ta 3S-O- 持つ, ある -PRES.PERF	2	qui-pia-toqueh	それがあった (lo han tenido)
ni-te-naguatia-ta 3S-O- 命じる -PRES.PERF	6	ni-te-nahuatia-toc	私は(彼らに)命じた (yo les he mandado)

④未来時制

『リベラ訓令』では、次表に示すような多くの未来形が確認された。単数主語の接尾辞は、ナウァトル語と同じく -s/z であるが、複数主語の接尾辞は -squete となっている。メキシコ中央高原のナウァトル語の複数主語の未来形、-squeh の帯気音 /h/ が /te/ となる傾向があると考えられる。以下いくつか具体的な用例を引用する。

文章 No.3: yguan ypal guelis quitatanisquete *limosna* yguan ypal quimatisquet[e] ten *gracia yndulencias quichiuasquete ganar* yeguantin *cofrades*.

そして、そのために献金を求めることができ、それによってコフラディアの団員である彼らが何らかの恩恵と免償にあずかることを知らされるのである。

文章 No.8: yguan ma[sic] muytas ycabildo yeuantin yeetin *christianos* ypal quitequitilis santa cofradía muixpantilis yeguan tatu *padre cura* yguan ypal nican *ele[c]sión* mupias se libro canpa muycuiylus yguan canpa muyculosquette yeguantin *ermanos calaquisquette* ypan se xiguiti.

そして、(それらの新任者は) 3名のあれらのキリスト教徒からなる市参事会によって承認(確認)されるものとし、それによって聖コフラディアの任務を遂行する(奉仕する)とともに、司祭の立会いのもと、ここで選挙が行われ、(その結果は) 台帳が用意され、そこに記録され、新しく入団する団員たちの名が記される。

文章 No.14: Yca nagui tamanti nutenaguatil asuga nican quiasis ytequil nican *Santa Cofradía* asuca caua mili yguan mil a su *ganado* asuten *limosna* yguan asu munamacas nican ytaquil muchiguas yca *al moneda* ytech se ylguiti pia ypal quiquitasque muchi tata *cura* yguan *ofis[iales]* quiquitasque yca munacas yta qui *Santa [Co]fradía*. 第四番目に私が命じることは、ここに聖コフラディアの奉仕が遂行され、とうもろこし畑の耕作や牧畜が行われると、ある日司祭と役員全員の承認の上、その収穫物が売られて現金が作られ献金の一部とする。聖コフラディアもそれを確認する。

文章 No.21: yguan u nichia *conseder* muchintin *cofrade* calaquisquette maqui asican a[sic] *yndulgencias* yperdon utema muchintin *santo pontifese* yguan nusan nichia *conseder* tent[sic] muyquilosquette yca *cofrades[sic]* qui asican unpuali tunali *yndulgencia*.

また、私は今すべての入団する団員に聖なる教皇による免償と免罪がもたらされることを確認し、本日それらの団員に (...) 40日の免償が記されることを確認する。

未来形の接尾辞 -s (単数主語), -squete (複数主語)

PIPIL	文章番号	NAHUATL	日本語訳 (西語訳)
① -s (単数主語)			
φ -gueli-s 3S- 出来る -FUT.SG	2, 3, 12, 13, 15, etc. 5, etc.	hueli-z	出来るだろう (podrá)
φ -mus-cali-s 3S-REF- 家を建てる -FUT.SG	2	mo-cali-z	家が建てられる (se construirá casa)
φ -mu-tequitili-s 3S-REF- 働く -FUT.SG	2, 8	mo-tequitili-z	労働される (se trabajará)
φ -nemi-s 3S- 現れる -FUT.SG	5, 12	nemi-z	現れる (aparecerá)
φ -te-naguati-s 3S-O- 命じる -FUT.SG	6	te-nahuati-z	(～に) 命じる (le mandará)
φ -mu-chigua-s 3S- REF- 行う -FUT.SG	7, 12	mo-chihua-z	作られる, 行われる (se hará)
φ -mu-yta-s 3S- REF- 見る -FUT.SG	13, 14, 15	mo-itta-z	見られる (se verá)
φ -mu-pia-s 3S- REF- 持つ -FUT.SG	8, 12, 17	mo-pia-z	所持される, 用意される (se tendrá)
φ -mu- (i) cuilo-s 3S- REF- 書く -FUT	8, 10, 12, 23	mo-cuilo-z	記される (se escribirá)

φ-mu-namaca-s 3S- REF- 売る -FUT.SG	8, 11	mo-namaca-z	売られる (se venderá)
φ-mu-tatani-s 3S- REF- 問う -FUT.SG	14	mo-tlatlani-z	問われる (se preguntará)
② -squete (複数主語)			
φ-qui-tatani-squete 3S-O- 問う -FUT.PL	20	qui-tlatlani-zqueh	それを問う (lo preguntarán)
φ-qui-mati-squet(e) 3S-O- 知る, 解る -FUT.PL	3	qui-mati-zqueh	それを知る (lo sabrán)
φ-qui-chiua-squete 3S-O- 出来る -FUT.PL	3, 17, 21	qui-chiua-zqueh	それを行う, させる (lo harán)
φ-qui-qu-ita-sque 3S-O-O-見る, 確認する-FUT.PL	3, 9	qu-ita-zqueh	それを確認する (lo verán)
φ-gualcalaqui-squete 3S-O- ~へ入る -FUT.PL	14	hualcalaqui-zqueh	~へ入る (entrarán para acá)
φ-mu- (y) cuilo- squete 3S- REF- 書く -FUT.PL	8, 5, 16, 21	mo-cuilo-zqueh	記される (se escribirán)

訓令という法的主旨により、先住民コフラディアに対して規則を言い渡すために未来時制を多用していることがわかる。さらに、3人称再帰代名詞 mo- が無人称・受動態の意味で使用されている。元来、古典ナウァトル語の再帰代名詞は、スペイン語のそれとほぼ同じ意味と用法であるとされてきた (Launey 1992: 59)。このため、スペイン語原文の内容を伝える好都合な文法機能であったとも考えられる。

この他、この『リベラ訓令』では、chiua (行う) を使役の助動詞として使い、その後、スペイン語の不定詞 (ganar, mandar, cobrar, gastar 等) を付加するという混成用法が見られる。例えば、上記文章番号3の quichiusquete *ganar* (lo harán ganar) などのように、とくに未来時制において、この混合用法の例が多くみつかった。ナウァトル語には、使役の接尾辞として、-tia, -Itiaがあるが、この混合用法で訓令という主旨と具体的内容を確実に伝えようとする意図が推察される (敦賀 2009: 44)。

16世紀半ば、スペイン王の命による先住民への納税や労役などに関する法的主旨で書かれた『1559年クアウティンチャン訓令』においても、未来形を多用することによって規則の言い渡しが行われている。しかし、『リベラ訓令』のような無人称・受動態の意味の再帰代名詞の使用は少なく、動作主格が明示された未来形で法的主旨を伝えている。16世紀半ばのメキシコ中央高原部のナウァトル語には、命令本来の構文が存在しているが、未来形や再帰代名詞の使用で、スペイン語の法的原文の緩やかな言い回しとなっているようである。

おわりに

植民地時代に先住民言語で書かれた文献は、一部を除き、オーラル言語をアルファベットで書き取ったものである。そのため、主語、述語、直接・間接目的語などの関係を見極めるための統

語論的解釈に大きな支障となっている。そのハードルを乗り越えることが古典ナウァ語文書研究の言語学的課題でもある。

今回分析対象とした『リベラ訓令』も、植民地時代に先住民言語で書かれた文献の一例である。今回の同訓令の名詞と動詞の形態・統語論的分析によって、17世紀のピピル語の言語学的実像について、不明な部分を残しながらも、ある程度明らかにすることができただろう。今後は目的語や、補語などの見極めも容易になると思われる。

植民地統治の過程で、スペイン語がヌエバ・エスパーニャ副王領の公用語となり、多くの先住民言語の上に立つ統治言語となった。しかしながら、古くからリング・フランカとして使用されていたナウァ系言語は、そのグローバルな言語機能が重用され、メキシコ中央部のナウァトル語は中央政府に最も近い位置で、統治者と被統治者の媒介言語としての役割を担うことになった。そのため、フランシスコ会をはじめとする人道主義の修道士らは、多くの辞書や文法書を編纂した。それらは、植民地統治と布教目的で作成されたものではあるが、『リベラ訓令』のような中心地から遠く離れたローカルな事項を扱ったナウァ系言語文書を解くにも非常に有効だと言える。

ただし、それらの辞書や文法書は、あくまで統治者側のスペイン人がスペイン語を基礎に編纂したものであり、したがって、ナウァ系言語独特の言語世界を解する完全無欠の手段ではないということに十分留意する必要がある。今回の『リベラ訓令』の解釈では、その時代から数百年を経た現代ピピル語からいくつかの貴重なヒントを得ることができた。また、その言語世界を知るためには、言語学的分析のみならず、その発話主らが生きた時空間により深い洞察をめぐらせる視点が重要なことは言うまでもない。

注

- 1) ナウァ系言語は従来、名詞接尾辞の特徴から、メシーカ語もその一つであるナウァトル語(náhuatl)とナワット語(náhuat)の二つに大きく分類されてきた。しかし、言語名称に関しては地方によって様々な呼び方をされている。本稿では、言語学者キャンベルに従い、それらを総称してナウァ系言語(core nahua)と呼ぶ(Campbell 1977:134-138)。
- 2) ピピル(pipil)という名称は16世紀の征服従軍者の記録(Días del Castillo 1982:461)や地理報告書(Relaciones Geográficas del Siglo XVI Guatemala 1982:264)などに既に記され、スペイン人の通訳として同行したトラスカラ人やメシーカ人らが彼らをそう呼んでいたことが伺える。一方、16世紀末グアテマラでマヤ・カクチケルのカビルド(市町村会)幹部らがナウァ系言語で書いている書簡では、言語名に関する単語として、mexicotlatolli (el habla de México: メキシコの言語)や maceualtlatlui (lengua de maceual: 労働者の言語)や、náhuatlが見られるが、pipilという語は使用されていない(Dakin y Lutz 1996:161)。

ピピルという名称を彼ら自身が古くから使用していたものかは断定できず、その意味についてもこれらの記録には記されていない。彼らの言語は「まるで子供(pipilpipil)が話しているように崩れた言語だ」という理由からピピルと呼ばれたと、18世紀末のグアテマラ人歴史家のフロスは述べている(Juarros 1981:254)。

しかし、現在のエルサルバドルでは、ナウァ系言語で貴族を意味するpilliに由来するという説が支配的である。例えば、1994年教育省発行の歴史教科書には、「クスカトラン王国の人々である"pipil"はナウァトル語の貴族(pilli)の複数形"pipiltin"に由来する」(Historia de El Salvador I

1994:43)と書かれ、広く一般に受け入れられていたようである。

エルサルバドル先住民審議会 (Comité Técnico Multisectorial para los Pueblos Indígenas de El Salvador) の『エルサルバドル先住民のプロフィール』(2003年)には、“nahua-pipil”という名称が使われている。2007年の国勢調査でもその名称で調査が行われた。これは、広域に分布が認められるナウァ系言語の一つであるという意味が込められたものと考えられる。なお、言語学者キングは中米のナウァット語を話す人々をピピル、言語はナウァット語という使い分けをしている (King 2004:52)。この他、メキシコ湾岸地方のナウァ系言語をピピルと呼ぶこともある。

本稿では植民地時代の中米におけるナウァ系言語の一言語として、ピピルという名称を使用することにしたい。言語や民族の名称には歴史上の勢力関係や支配関係が伺える (カルヴェ 2006:119) が、これについては別の機会に分析を深めたい。

- 3) アラウス、シュルツ・ヘナの調査がエルサルバドルで出版されたのは、それぞれ1960年、1977年である。
- 4) ナウァ語の人称は西欧語と同じく1人称・2人称・3人称の単数・複数に区別され、それぞれに対応する人称代名詞が存在する。
- 5) 文書には表題がないので、“Ordenanza de Fray Payo de Rivera para la Cofradía de la Santa Veracruz en 1666”『パヨ・デ・リベラ司教によるサンタ・ベラクルスのコフラディアへの訓令 1666年』(全8頁)という仮題をつけた。『エルサルバドルの民族誌』(Montes 1977)には、本訓令のファクシミリが紹介されている。筆者は1997年～1999年の「エル・サルバドル総合学術調査」(調査主体：京都外国語大学、代表：大井邦明、文部科学省科学研究費補助金「国際学術・基盤研究」)に参加し、『リベラ訓令』を撮影し、解説を始めた。2006年、2007年に再度現地を訪れ、同訓令のほか『サンタ・ベラクルスのコフラディア記録』のほぼ全頁をデジタル撮影した。デジタル画像でインクが薄色化した部分などの解説に改善を見ることができた。
- 6) エンリケ・パヨ・デ・リベラ司教 (1612-1685) はセビーリャ生まれのアグスティン会修道士で、1659年から1668年までグアテマラ教区司教を勤めた。1668年メキシコ大司教区の司教に選出され、ベラグア副王の逝去の後1673年に27代副王に就任し、1680年まで大司教と副王を兼務した (敦賀 2009:32-33)。また、オクタビオ・パスによると、17世紀の修道女で詩人のソル・フアナを寵愛した副王であったという (パス 2006:17)。
- 7) *Libro de la Cofradía de la Santa Veracruz*, Archivo de la Catedral de Santa Ana, folio. 2r-4r. 保存状態不良のため解説不明な部分も多く、今後の課題としたい。
- 8) 1660年2月1日付グアテマラ東部のチキムラ・デ・シエラの教会人事に関するスペイン語書簡 (AGCA, A1.11.3, Leg.6057, Exp.53710, folio. 1-3.) や同年7月20日付けのリベラ司祭からスペイン本国宛の納税者削減に関する書簡の写し (AGN Hospital de Jesús, Vol. 67. exp.2, folio.7) などにヒメネス秘書の署名が確認できる。
- 9) 先住民語によるコフラディアの訓令が各地の教会やコフラディアに所蔵されていることが確認されているが、多くはスペイン語原文からの訳になっている (Lockhart 1999:318)。
- 10) メキシコ社会人類学高等調査研究所 (CIESAS) 古典ナウァ語講座で提案された形態・統語論を中心とする解説方法に準じている (Herrera, Peralta, Von Mentz, Rockwell 2007: 149-184)。
- 11) 原本は“Ordenanzas de Cuauhtinchan, año 1559, Archivo Municipal de Cuauhtinchan, Paquete I, Exp.2”だが、本稿では Reyes García が訳した“Ordenanzas de Cuauhtinchan, año 1559” (1988:180-215) を参照した。
- 12) 原本は“Fondo Colonia, Caja 2, Expediente1562, Archivo General del Estado de Tlaxcala”だが、本稿では Herrera, Peralta, Von Mentz, Rockwell (2007) を参照した。
- 13) ロックハートもメキシコ・トゥーラのコフラディアのナウァトル語訓令について、「スペイン語

- からナワトル語へのおおざっぱな訳だ」と述べている (Lockhart 1999:314-317)。
- 14) グアテマラで 16 世紀末にマヤ先住民らがリング・フランカであったナワ系言語で書いた文書では、/tl/ 音が見られると同時に、/w/ や /u/ 音が擦音化して /g/ 音になる音素も確認されている。ディキンは、不完全に習得した標準ナワトル語と土着のピピル語が混合し、リング・フランカとして使用されたためだと分析している (Dakin y Lutz 1996:171)。
 - 15) 現代ピピル語では、padre (父親) は tecu, tegu というが (敦賀 2000:318), tata はメキシコでよく使用される。もし、17 世紀から tecu, tegu を使用していたと仮定すると、本訓令の訳者はメキシコの語彙を用いたことになる。
 - 16) 16 世紀末にグアテマラでマヤ先住民らによってナワ系言語で書かれた書簡集には、先住民らが信頼を寄せる聖職者に対して to (私達の) -tlazomauiz (敬愛する) -ta (父 / 神父) -tzin, to (私達の) -ta (父 / 神父) -tzin など、尊敬 / 敬愛の接尾辞をつけて呼んでいる (Dakin y Lutz 1996:159)。
 - 17) 教会は先住民信者にスペイン本国の宗教体系を強要することなく、伝統的な音楽や踊りなど彼らの芸能や生活習慣を容認していたため、中米では現在でも先住民文化とスペイン文化の融合という形で各地にコフラディアが存続しているという (MacLeod 1973:327-328)。
 - 18) ディキン博士から直接伺った説明である。

参考文献

[未刊行文書史料]

Libro de Cofradía de la Santa Veracruz, Archivo de la Catedral de Santa Ana, El Salvador.

Archivo General de la Nación, México. Hospital de Jesús, Vol. 67, Exp.2.

Archivo General de Centroamérica, A1.11.3, Leg.6057, Exp.53710, folio.1-3 (Asociación para el Fomento de Estudios Históricos en Centroamérica, <http://afehc-historia-centroamericana.org/>) .

[一次史料]

Carochi, Horaccio

1983 *Arte de la Lengua Mexicana*, UNAM, México.

Dakin, Karen y Christopher H. Lutz

1996 *Nuestro Pesar Nuestra Aflición- tunetuliniliz, tucucuca, memorias en lengua náhuatl enviadas a Felipe II por indígenas del Valle de Guatemala*, UNAM y Centro de Investigaciones Regionales de Mesoamérica, México.

King, Alan R.

2004 “El náhuatl y su recuperación”, *Científica* 5, pp.51-70, Universidad Don Bosco, San Salvador.

Mendieta, fray Geronimo de

1980 *Historia Eclesiástica Indiana*, Porrúa, México.

Molina, Fray Alonso de

1992 *Vocabulario en Lengua Castellana y Mexicana y Mexicana y Castellana*, Porrúa, México

Olmos, Fray Andrés de

1993 *Arte de la Lengua Mexicana*, UNAM, México.

Ordenanzas de Cuauhtinchan año 1559

1988 *Documentos sobre tierras y señoríos en Cuauhtinchan*, Traducción por Luis Reyes García, Gobierno del Estado de Puebla, CIESAS y Fondo de Cultura Económica, México.

Ruz, Mario Humberto, coordinador

2002 *Memoria Eclesial Guatemalteca-visitas pastorales, 3 tomos*, UNAM, México.

[その他]

Campbell, Lyle

1985 *The Pipil Language of El Salvador*, Mouton Publishers, New York.

1997 *American Indian Languages-The Historical Linguistics of Native America*, Oxford Studies in Anthropological Linguistics, Oxford University Press, New York.

Comité Técnico Multisectorial para los Pueblos Indígenas de El Salvador

2004 *Perfil de los Pueblos Indígenas de El Salvador*, Ministerio de Educación, CONCULTURA, Pueblos Indígenas, Banco Mundial, Unidad Regional de Asistencia Técnica RUTA, San Salvador.

García de León, Antonio

1976 *Pajapan-un Dilecto Mexicano del Golfo*, INAH, México.

Herrera, C. V. Peralta, B. Von.Mentz y E. Rockwell

2007 "La repentina muerte de Catalina Toztlapal: análisis y traducción de un texto náhuatl de 1562", *Estructura, Discurso e Historia de Algunas Lenguas Yutoaztecas*, G.Betancourt y J.L.M.Zamarrón Coord., pp.149-184, INAH, México.

Juarros, Domingo

1981 *Compendio de la Historia del Reino de Guatemala*, Editorial Piedra Santa, Guatemala.

Karttunen, Frances

1981 *An Analytical Dictionary of Nahuatl*, University of Oklahoma, Norman.

Lastra de Suárez, Yolanda

1986 *Las Áreas Dialectales de Náhuatl Moderno*, UNAM, México.

Launey, Michel

1992 *Introducción a la Lengua y a la Literatura Náhuatl*, UNAM, México.

敦賀公子

León-Portilla, Asensión

1988 *Tepuztlahcuilolli-impresos en náhuatl*, UNAM, México.

Lockhart, James

1999 *Los Nahuas después de la Conquista*, Fondo de Cultura Económica, México.

Ministerio de Educación

1994 *Historia de El Salvador I*, San Salvador.

Montés, Santiago

1977 *Etnohistoria de El Salvador-Cofradías Hermandades y Guachivales, I y II*, Ministerio de Educación, San Salvador.

Sosa, Francisco

1978 *El Episcopado Mexicano*, Editorial Innovación, México.

Schultze Jena, Leonard

1982 *Gramática Pipil y Diccionario Analítico*, Federación de Caja de Crédito, San Salvador.

井上幸孝

2009 「植民地時代メキシコの先住民社会に関する歴史的研究の進展と可能性」, 『神戸市外国語大学外国学研究 72』神戸市外国語大学外国学研究所, 1-23 頁。

カルヴェ, ルイ = ジャン

2006 『言語学と植民主義』, 三元社。

パス, オクタビオ

2006 『ソル・ファアナ = イネス・デ・ラ・クルスの生涯 - 信仰の罫』, 土曜美術社出版販売。

敦賀公子

2000 「エル・サルバドルのピピル語—今昔—」, 大井邦明 編『エル・サルバドル総合学術調査報告書』, 京都外国語大学, 303-324 頁。

2007 「中米におけるナウァ系言語と人々の足跡: 言語と歴史の研究史—グアテマラ, エル・サルバドルを中心として—」, 『神戸市外国語大学研究科論集第 10 号』, 73-89 頁。

2009 「多言語社会の中米におけるリンガ・フランカー—17 世紀ピピル語文書分析—」, 『神戸市外国語大学外国学研究 72』神戸市外国語大学外国学研究所, 25-48 頁。

[Web サイト]

エル・サルバドル 2007 年国勢調査 <http://www.censos.gob.sv/>